ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18265249

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, エク霊, 霊幻総受け, 無理矢理, 怪我師匠(ゆくゆく治ります), モ腐サイコ小説50users入り

主にモブ霊です。ヤクザと元愛人パロ2話目。NTR（ネトリ）っぽいかもしれません。
失踪した師匠が悪い？のかも

詐欺師のスティグマ　2

タバコに火をつけながら、ずんぐりとした組長はトントンと霊幻の写真を叩く。
「若いやつらに拷問させてるが、コイツ口を割らねぇ──というか、口が回りすぎて何がなんだか、ホントかウソかさっぱり、ってぇ有様なんだよ。頼むよ茂夫、お前の超能力で脅して、ぱぱっと吐かせてくんねぇか？」
高級な黒いスーツを着慣れた茂夫は、そっと愛おしげに霊幻の写真を撫でた。
「──難しいと思いますよ。師匠はいい人だ。それも、筋金入りの。エクボの安全を守れるのなら、あの手この手で誤魔化してくると思います」
師匠。
茂夫が霊幻をそう呼んだ瞬間、たぬきジジイの組長は、嫌な冷たい脂汗をこっそりと背中に流した。
茂夫がこの組に協力し、組長の言うことを聞く条件の一つに、『師匠の情報があればすぐ渡すこと』とあったからだ。
顔をこわばらせる組長に、茂夫はクスっと笑う。
「大丈夫ですよ。師匠のことだ、僕らとの繋がりなんて少しも見せなかったんでしょう？偽名だって使っていたはずだ。それを責めるつもりはありません。ただ──」
スパン。組長の手に持っていたタバコが半分に切れる。
「拷問は今すぐやめさせて下さい。続きは僕たちでやります」
「！お前ら超能力者でか！？そこまでしなくても……！」
「相手はその超能力者たちを長年手懐けていたヒトですよ。気をつけた方がいい。1人だけ相手をさせる、なんてしたら、手玉に取られますよ」
「……分かった。茂夫、お前がそう言うなら……」
かたかたかた。
組長の手が震えている。
組長は超能力者たちをいいように使っているが、その反面、そのチ

カラを心底恐れていた。
（同じ利用するにしても、師匠とは雲泥の差だ）
霊幻が茂夫を恐れたことなんて、少なくともそれを表面に出したことなんて、一度も無かった。
それがどれだけ有難いことだったのか、こうやって誰かに超能力をあからさまに利用されるようになって、気が付いた。
誰かに怖がられるたびに。
傷付く茂夫がいた。
いつしか超能力者の仲間とだけ過ごすようになっていったが、それでも『普通の人』から無意識に疎外される寂しさは消えなかった。
それに超能力者の間でだって、格差は存在する。
最強の能力者として、テルからヒかれた時。
弟の律から、恐怖を向けられているのを、改めて認識した時。
茂夫は、霊とか相談所に、むしょうに帰りたくなった。
ししょう。
ししょう、こんなとき、どうしたらいいですか……。

これまではそこで応えてくれる人はいなかった。
空き部屋でたたずむのみだ。
でも。いま。
応えてくれる人の、居場所が分かろうとしていた。

「師匠は、どこですか」

※※※※※

組が所有しているビルの一つ。
その地下室に、霊幻は監禁されていた。

……無残な姿に成り果てて。

地下室は掃除しやすいように、床が水洗いできるようタイル張りになっている。元は肉か何かの冷蔵室だったのだろうか。
そのタイルの上に、汚れた木の椅子に裸で拘束されて、霊幻は虚空

を眺めていた。
手指の爪は無い。足の裏も切られているのだろう、サラサラと血が流れ続けている。
右腕には何本も注射を打たれた跡。自白剤だろうか。
それがまだ効いていて、霊幻は小さく『ぁー……』といいながら、たらたらとヨダレを流していた。
ひどい有様だが、
（歯を折られたり、指を切られたりする前で良かった）
と、ヤクザ思考で茂夫はひとまずホッとした。
「こ、こいつ、中々口を割らなくて──それどころか、俺たちを惑わすようなことを言ってきて……。知らなかったんです、影山様のし、師匠だったなんて。さ、さすが、きだいの詐欺師ですね、へへ……」
かちゃかちゃ。突然入ってきた茂夫の前で身支度が間に合わず、ズボンを履きながらチンピラが愛想笑いをする。
霊幻に性交の痕跡は今は見られないので、これから、だったのだろう。
ぶわ、と茂夫の怒りのゲージが上がる。誰でもが触れていい人では無いのだ、師匠は、と。
確かに、いま椅子に座っている霊幻は、触れたくなるような魅力があった。
霊幻は色素が薄い。肌は白くてやわらかそうで、胸の尖りも性器も、愛らしい淡い桃色をしている。
赤い唇からのぞく舌も、どこかサクランボのような色薄さがあった。
それに、いつも自信ありげに動く霊幻が、ぼんやりとして、優しい目つきをしているのは、なんとも言えず征服欲をそそってきた。

──レイプだって拷問の1手段だ。

そう茂夫はのどを鳴らしたが、それを目の前のチンピラがやろうとしたことは許せなかった。

す、と茂夫はチンピラに手のひらを向ける。

「ひっ！？影山様、どうかお許しください！！」

こうなってくると、あのピンク色のキレイな珊瑚みたいな爪を剥がされたこと、すべらかな足の裏の皮膚を裂かれたことまで、茂夫は腹が立ってきた。
ふわふわとチンピラは空中に浮いていく。恐怖で顔はぐしゃぐしゃだ。

「か、影山様……ゆるじでぐださ……」

「……モ、ブ？」

びくん。
茂夫の身体が跳ねて、ドサっとチンピラが落ちた。
おそるおそる振り返ると、うつろな瞳が、それでも確かに、茂夫を捉えていた。
「し、しょう？」
余り強い薬では無かったのか、どうやら霊幻の意識が戻り始めていたらしい。
茂夫が霊幻に、人に超能力を向けている所を見られたくなくて、それだけで助かったチンピラが慌てて逃げ出したが、もはや茂夫にはどうでも良かった。
「師匠、アンタ、なんで何も言わず……いや、もういい、アンタは僕たちを裏切ったんだ」
「モ、ブ……違う……」
薬で回らない頭では、いつもの弁舌も回らない。
さっ、と。
茂夫の中で、黒い考えがよぎった。
カツカツと鉄板入りの革靴を鳴らしながら霊幻に近付いた茂夫は、しゅるしゅると霊幻に巻き付いた縄を外す。ある意味での支えを失った霊幻はガクンと前に転びそうになったが、茂夫が受け止め

た。
高そうなスーツが、汚れるのもいとわずに。
「……まず手当てしないと」
そのまま姫抱きにして、地下室から出て行く。かって知ったる組のビル、医務室の場所も茂夫は知っていた。
（こんなところに師匠を放ってはおけないけど）
とりあえず今は、このビルでなんとかすることに茂夫は決めたらしい。
「モ、ブ……お前……」
姫抱きされながら、戸惑ったように霊幻が茂夫の高級スーツに手の甲で触れる。
「あんたが悪いんだ」
ヤクザになったことを責められた茂夫は、苛立ったようにそう返した。

このビルの医務室にはたまたま広めのベッドがある。まぁ、本来は拷問に耐え切れず死んだ死体から臓器を取り出しやすいようにの広さだが、今はただ霊幻が休みやすいだけの広さとなっていた。
横になって、やっと少し身体が楽になったのか、ふぅと霊幻は息をついた。
「モブ、水が、飲みたい」
「……分かりました」
震えない、手。声。
霊幻のそれらを噛み締めながら、茂夫は淡々と動く。
首の後ろにクッションを当てて、ウォーターサーバーからくんできた水のカップを口に当てると、あまり水を飲まされていなかったらしい霊幻は、美味しそうにこくこくと飲み干した。
組の医務室には、爪を剥がされた時用の軟膏がある。
「……どうして何も言わずにいなくなったりしたんですか」
まずそれを手に塗り、ガーゼを巻いてから、包帯を巻いた。
「えーとそれはらな、緊急の依頼が入っれ……」
「まだ自白剤が効いてる。嘘は付けないと思った方がいいですよ」
霊幻の両手がミトンをつけたみたいになった。

「……その方が、お互ろためにいいと思っら」
次は、足。爪の前に、ぱっくりと裂かれた足の裏の傷を縫う必要があった。
茂夫は棚から傷用のホッチキスを取り出す。
「ほんとに勝手だな、アンタ。……痛いですよ、我慢して下さい」
バチン！傷を縫う為にホッチキスを閉じるたび、ビクンと霊幻の身体が跳ねた。
昔はよく拷問中にアキレス腱を切ったものだが、最近は足の裏を縦に切ることの方が多い。
「ぐっ……うう」
アキレス腱を切られたことに絶望して、命を絶つことが頻発したからだ。それでは情報を聞き出せない。足の裏なら、我慢すればぎりぎり歩けないこともないので、ほのかな希望を残せる。
「……はい、縫い終わりました。次は爪の手当てをしますよ」
「……慣れてるんらな」
ぜぇぜぇと肩で息をする霊幻に、茂夫は答えない。
慣れてしまった、ことは。
組に入ってから、汚いことばかりさせられてきた。
「両親が2人とも重いガンになりまして。助けてくれたの、組長だけだったんです」
ぎら、と茂夫の目が凶暴に光る。
「師匠が助けてくれてたら、こうはならなかったのに」
霊幻は息を飲む。ガーゼと包帯を巻かれた足は纏足のようだった。
「……すまなかっら。だけどな、モブ……」
「すみません、今は誤魔化されてあげる余裕が無いんです」
ぎし。
ギラギラした目をしたまま、茂夫は霊幻の上に覆いかぶさる。
「償ってください」
「！」
弟子から劣情を向けられるとは思っていなかった霊幻は、とっさにミトンのような両手で茂夫を押し退けようとする。
でもそれは、茂夫を煽っただけだった。
「モブ、俺はエクボと……」

「知ってます。むしろ、処女じゃないなら、多少乱暴しても大丈夫、ってことですよね？」
「……」
霊幻は真っ直ぐ茂夫を見て、ミトン包帯でぺち、と茂夫の頬を叩く。
「ばかやらう」
その真剣な叱る顔に、茂夫は泣きそうなほど嬉しくなった。

※※※※※

「んっ……はぁっ……」
くちくち。淫らな水音をさせて茂夫の指が霊幻の中を出入りする。
「しまってる……、あたたかい……」
「……っ！」
赤面して霊幻は顔を逸らした。
「あんまり使い込んでる、って感じじゃないですね」
「……そんらに頻繁に、やってたワケらない」
まだ自白剤の抜け切っていない霊幻は、ペロっとエクボとの情事を漏らす。
茂夫はそれに興奮もするし──苛立ちもした。
結局はそのどちらもが、劣情を掻き立てるのだが。
ずぶずぶと抜き差しする指に、アナル用のローションをたす。
ずぷん、と３本入れた時。
「……ぁっ！？」
にたり、と茂夫は笑ってしまった。やっと霊幻の前立腺を見つけたのだ。
くいくいと指を曲げて、先ほどのあたりを刺激する。
「ゃっ……やめろっ……あぁっ……」
はぁっ、と熱っぽい息が霊幻の口から漏れる。
ゆるゆると霊幻の性器も立ち上がってきていた。
「……もういいですよね」
茂夫はかちゃかちゃとベルトを外す。
取り出した性器を、ひたりと霊幻の入り口に触れさせた。

「！？やめ……っ！」
ずぶ、と一気に侵入する。
霊幻を手に入れた。そんな錯覚に茂夫は一瞬多幸感に満たされる。
しかし。
「エクボぉ……っ」
ミトン包帯の腕で顔を隠した霊幻が、つうっと涙を流すのを見せられて。
「……よほど酷くされたいみたいですね、師匠」
「ひぁっ！？」
一気に奥まで押しいった。
「ぁっ、ぁっ」
いい所に当てられて、ぴくんぴくんと包帯纏足の脚がはねる。
「！？いっしょは、キツ……」
茂夫が霊幻の雫を垂らしていた性器をやわやわと刺激すると、慌ててミトンで静止しようとする。
その涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で。
「興奮します……」
ぐわっと背筋まで甘イキした茂夫は、指先で先端をほじって霊幻をイかせた。
「あぁ……っ」
びくびくと震える身体が、きゅうきゅうと茂夫を締め付ける。
「く……っ」
刺激された茂夫は堪らなくて、一度霊幻の中に吐き出した。
「ぐ……っ」
腹の中に広がるあたたかい屈辱に、霊幻は顔を歪める。
「……まだ終わりじゃないですよ」
がぶりと鎖骨に噛み付いて告げられた言葉に。
霊幻の顔が青ざめたのを見て、茂夫はうっすらと笑った。

※※※※※

キスマークや噛みつき跡だらけで気絶した霊幻に、ロッカーから拝借した白衣を着せて、茂夫はまた姫抱きで彼を運び出す。

行き先は、茂夫の所有しているタワーマンションの最上階だった。
エレベーターの行き先ボタンは存在しない。カードキーを差し込むことのできる人間だけが行ける部屋だ。
分厚い絨毯が足音をかき消す。
真っ黒なドアを開けて、その左手の本棚の裏の隠し扉を開けて。

「ああこれでやっと――元通りだ」

その『霊とか相談所』を完璧に再現した部屋に、茂夫はうっとりと霊幻を座らせた。

続